

に六年を過ごしたと思う一時でした。

この原稿の中に記事にしていけない事件は数限りなくあります。また忘れ去って記事として書いてない件は多くあります。老化が原因か、シベリアの地名、旧部隊の戦闘状況、駐屯した陣地名、部隊の上官、同年兵等の名前などまだまだ多く、また機会がありましたら報告します。

【執筆者の紹介】

私と馬橋君が入営した頃は戦争も総力戦に突入し、私の家業の織物業も軍の銃火器を作るために織物機械その他すべての金物は供出を強制されて廃業しました。あらゆる物資は統制され、米も配給になり、勝つためには欲しがりませんと総力戦の様相を呈していました。

同年代の馬橋君は満州六一二部隊第一中隊に入隊され、二等兵として毎日厳しい訓練をされていました。

黒河省環環は、ソ連とは目と鼻の先に見える地帯でした。しかしその頃は銃火器、野砲その他あらゆる武

器は南方戦線へと送られ、正に武器を持たない張り子の虎でした。

馬橋君の父は明治三十六年日露戦争で二〇三高地の激戦に参戦され、乃木大将の馬丁として活躍されていたそうです。また兄も大東亜戦争の終期に沖繩で戦死され、もう一人の兄も中国、フィリピン等いずれも激しい戦闘に参加された一家と聞いています。

馬橋君と機会があり同席する時はシベリア抑留の話にあけくれる同志です。

幼少の頃から絵が好きで、毎日のように好きな絵を描いてばけにならないようにと元気な毎日を送っておられます。

(福井県 林 俊男)

軍隊から抑留の五年間

長野県 荻原 進

昭和十九(一九四四)年十二月十日、現役兵として

東部十七部隊へ入隊（近衛輜重兵連隊）。東京は毎晩のように空襲警報のサイレンで防空壕へ避難の繰り返し。そんな中で北支派遣の準備を整え、十二月十五日、渋谷駅から軍用列車に乗り中央線甲府駅で夕食の弁当支給。翌朝、名古屋の手前で二時間位停車（十二月八日、濃尾の大地震のため）。十二月十八日、博多着。二日位旅館へ分宿。十二月二十一日、博多出港。夕刻、釜山港上陸。十二月二十五日、北支開封着。北支派遣弘一五六三〇部隊の編成となり、昭和二十年三月、初年兵教育終了。四月より幹部候補生の部隊集合教育。ここでの教官大原貴中尉が、奇しくも同郷の農学校の先輩であったことが、教育が終わってから分かった。

予備士官学校へ派遣される前、部隊の壮行会が将校集会所で開催された時、一人一芸の順番が回って来たので起立して母校の校歌を歌ったところ、大原教官も起立して唱和して下さり、ほんとに奇遇であった。大原さんもウランバートル抑留を経て復員し、今は毎年の戦友会で当時を語り合っております。

六月一日、北支保定予備士官学校入校。この頃より日本の敗色濃く、沖繩玉砕の報あり。北支軍三カ師団、関東軍編入のためその傘下の候補生、満州へ移動となる。輸送中、吉林を過ぎ山中を走る列車の窓から、野生の芍薬が咲き乱れていた景色は忘れられない。七月十日、満州石頭予備士官学校へ転校。教育中、八月八日夜半、非常召集でソ連参戦を伝えられた。この候補生隊は、教育編成（三千六百人）のまま戦闘体制に入り、直ちに奇教中隊は牡丹江市守備のため、綏芬河方面より侵入するソ連戦車を主とする機甲軍団を磨刀石において迎え撃つため出動して行った。ソ軍の重戦車に対し、急造爆雷による肉迫攻撃で大隊長以下多数の戦死者を出す。我々四中隊は第二線陣地で、たこつぼを掘り肉攻準備中、遠くで戦車砲の音を聞く中、出発となり昼夜の別なく行軍し教化の飛行場に到着、武装解除となる。中隊長の終戦詔書の朗読が終わったのが八月二十四日と覚えている。疲労のためその場に倒れて眠る。起きたのは夕刻だった。

それからは格納庫の屋根下に泊まりソ連の作業で、

飛行場の施設の貨車積み作業。日本軍の将校の軍刀、双眼鏡、拳銃等の箱詰め、荷作りもした。軽便鉄道の線路のレール、小型電気機関車等の重量物の貨車積み作業もした。そんな作業が続くうちにアメーバ赤痢となり、入院することになった。

その病院は満人小学校というが、低い床の上に乾草を敷いたところへ毛布一枚の雑魚寝で、軍医はおらず、日本軍の衛生兵が何人かいて、茶碗一杯の重湯をくれる。一日二十五回位の便所通いは必死で、薬は全くなし。便所へ行けなくなった戦友は次々と亡くなり、また亡くなる前に脳症を起こしてうわ言を言うようになると数時間で亡くなる。俺もここで死んでは犬死にだと思ひ、齒を食いしぼり耐えた。そのうちに少し快方に向かい退院となったが、いまだ歩行がおぼつかなかった。着いた所は砂河沿の收容所で、地面を少し掘って半地下の上に屋根を作り天幕を張って何日か過ごす。ここで顔見知りの戦友とは別れ別れとなったが、それでも軍曹の階級章に座金を付けた候補生は大勢いた。

間もなく昼夜を通して行軍した。軍用道路を逆に愛河へ向かって千人単位の移動である。数人のソ連兵が前後に付いて一日四〇キロメートル位で、夜は小高い丘の上で焚き火を囲み野宿である。この移動が一週間続き、十一月の初め愛河に着き、日本軍の赤レンガの兵舎に收容された。この移動の途中、開拓団の部落を通った時、婦人や子供、老人が手を振っていたが、「頑張って」の声だけで、どうすることもできなかった。何とも言いようのない空しさは今でも脳裏を離れない。

愛河の兵舎での收容生活は食料も少なく、玄粟等の粗悪なもので、野菜も少なく、栄養失調で毎日幾人かの人たちが亡くなっていった。作業は自分たちで使う炊事の薪取りで、日本軍の将校官舎を壊して運ぶ作業と貨車への物資の積み込みであった。この兵舎に翌年（昭和二十一年）の四月まで收容所されていたが、その間に何回か、東京へ帰すからと荷物を持って全員営庭へ集合させられた。荷物はそのまま、シャワーつきの入浴用のトラックが来て入浴をさせられた。衣服

も別な滅菌した物を与えられ、着ていた衣服と荷物は、飯盒と水筒を残して全部トラックで持ち去られ、着の身着のままとなる。このような事が何回かあり、私物も何もなくなり、飯盒と水筒だけが全財産となった。命の次に大事な物として家に着くまで持って帰り、今も大切に残してある。こんなことがあって、旧軍隊以来、駆除に困っていたシラミも完全になくなり、ソ連のやり方を評価する面もあったと思う。

このようなことで昭和二十年を旧兵舎で越年したが、翌二十一年正月頃より、余り栄養失調による死亡者が多いので野菜（白菜が主）の給与が多くなり、死亡者も少なくなった。三月を過ぎると寒さも少しやわらいで、営庭の隅に積んであった遺体をソ連のトラックに積み込む作業も始まり、「東京ダモイ」の話もちらほら出るようになった。

忘れもしない四月十一日「全員集合」があり、またかと思つたが今度は本物らしく、人員を点検して愛河の駅へ向かう。愛河の駅にはソ連の貨車がずらりと停車している。貨車の中は二段になって中央を境に四カ

所に分かれ、一カ所に十人だつたと思う、一車両四十八人で、三十車両位あつた。中心部に炊事車と指揮班車、ソ連のカンポイ（歩哨）車等があり、扉は二〇センチ位開けて、板で小使用の樋が外に向けて作つてあり、進行中でも用が足せた。こんなに設備があつて果たして東京かと半信半疑であつた。間もなく発車、綏芬河を過ぎて北へ向かい出した。またまただまされた、行くところまで行け、殺されるわけではないだろうと落ち着いた気分になつた。誰かが作つたのであろう、厚い板壁が細く削られ外の景色が覗けたので、たまに停車すると駅名などが読み取れた。一日じゅう走り続ける日もあつて、炊事では食事はできているが停車しないと分配ができないので、空腹のまま一日を過ごす日もあつた。北へ向かつて走っていた列車も西へ向かつていた。右にバイカル湖の湖面が一日じゅう見え隠れする。広いのには驚く。イルクーツクに着くと貨車は引込線に入り停車。間もなく「バーニヤ」と言つて一車両ずつ入浴に行く。全部立つたままでのシャワーで、一人ずつ区切りのある設備のよい浴場

で、身も心も爽快になる。入浴のため一日じゅう停車していた。

イルクーツクを発車して数日、ガタガタと振動音が高く単線を走っている。シベリア鉄道本線から分岐（ノボシビルスク）して南に向かっている。途中、砂漠地帯もあり、兎のような動物が穴から出たり入ったりしているのをカンボーイが銃で撃っていた。途中で五百人下車、我々は残り五百人でなお南下。小さな田舎村で古い炭鉱（キリトマシャフト）の村で下車。四月十一日、愛河出発以来二十二日目の五月三日の日だったと記憶している。

吹雪の中を走ったシベリア鉄道だったが、ここへ着いたら野菜畑にカボチャの花が見えて、ソ連の国の広さを感じた。そこは小高い丘の上にバラ線が開いて隅には監視の望楼がある。囲いの中に天幕が無造作に積んであり、これを使って我々の手で半地下の幕舎を作り、生活が始まった。

作業は一昼夜三交代の八時間労働で、主な作業は炭鉱作業である。入り口から斜めにトロッコが降りてお

り、明かりはカーバイトを使ったガス灯である。炭層は一メートル五〇センチ位で、一番下にやや水平にトロッコの線路がある。切羽では人力でドリルを使って発破の穴あけ（炭質が日本の木炭のようで、軽く艶もなく、コンロで使用できる無煙炭）である。一メートルの深さの穴を五本あけるとソ連の女性が発破を仕掛けに来る。我々が三〇メートル位避難すると、発破を仕掛けた女も我々のところへ来て、音を数えろと言う。五个鳴ればよし、もし一個でも不発があると危険だと言っていた。発破の後はエアのホースを使ってガス抜きをして、つるはしで碎き、一メートル進み木材で鳥居を作って八時間の作業ノルマであった。全体のノルマは出炭量で定められていて、百分達成はできなかった。

炭鉱作業の他に収容所内の作業、炊事班等があり、水はドラム缶で馬車で運んでいた。こんな作業が続く中、七月のある日、発熱で作業を休んで室内で寝ていたらソ連側の巡視があり、病人がこんな所で寝てはいけない、直ちに入院ということで、五人位だった

と思うがトラックの荷台に乗り、ソ連の下士官が一人付いて二日位走ってカガンという町の病院へ入院する。この病院は日本人三十人位とドイツ人十人位で、入院と同時に入浴、着物はシャツとパンツだけで個々のベッドで、毛布一枚。疲れていたので三日位、昼夜眠り続けた。病院での生活は快適で、朝は看護婦（ウズベク人）が体温計をくれ、食事はベッドまで運んでくれた。幾日かたって快方に向かうと食事は食堂で、皆一緒にロシア料理だった。医者は日本の軍医一人、ドイツの軍医一人、ウズベク人の医者一人の三人の医者で、看護婦数人、炊事婦数人、掃除婦数人である。病室は十室位あり、入浴は週一回でシャツとパンツを替えてくれ、何回か映画も見せてくれた（主にレーニンが出るロシア革命のもの）。

この入院中に一生懸命ロシア語を勉強した。また、この病院から家に初めて葉書を出した。月に一回、ソ連の軍医少佐（マイヨール）の診察があり、退院の決定が下される。また時々軽作業もあって、数人位の入院が繰り返された。十二月のマイヨールの診察で、

この病院に長くいては早く帰れないと思い、ラボータハラシヨウと言って退院を希望した（今になって考えれば、病院にいた方が早く帰れたかもしれない）。五カ月の病院生活に別れを告げ、退院者数人とソ連下士官の引率で列車（客車）でタシケント近くの町チルチックの収容所に入る。

この収容所は約千人で、奉天（瀋陽）の航空隊の方たちで、無傷で旧軍隊のままであった。作業は主に工場作業で、ステンレスの製缶工場と農機具の部品工場の中の二つの工場専用の汽車で通勤した。他に一部、建築作業と、収容所内には炊事班、洗濯班、被服修理班、床屋が三人位である。洗濯班の人たちは楽団を作って、食堂の食事の時に革命歌やロシア民謡等を演奏してくれた。楽器はアコーディオンとギター、コントラバス位であった。この収容所で昭和二十二年の正月から昭和二十三年の六月までを過ごした。気候は、冬は零下一五度位まで下がり、夏は四〇度位に上る時もある。夏は雨がほとんど降らない（四〇度を超える屋外作業は昼から午後三時まで休みとなる）。私は農機

具工場の鑄物の型作りと溶鉱炉の湯流し作業で、交代でも夜勤もあった。ラーゲルでの朝と夕方の時間には民主運動が盛んになり、ソ連政治部の将校により大隊長交代、アクチーブ等ができ、労働歌の指導と政治サークル等で日課が定められた。六月になってこのチルチックの収容所でもダモイが始まり、パミール高原の西の端、中央アジアの地から来た時と同じような貨車で、待望のナホトカに着く。

浜辺に降りて待つこと半日位、今降りた貨車に乗れとの指示で元の貨車に乗ると海岸の引込線へ入り、当分の間労働大隊としてこの地で作業することとなる。宿舎は貨車で、作業は建築、鉄道の路盤工事、築港等で、食料の給与も次第によくなり、ナホトカまで来ているという気分が皆落ち着いていた。

貨車の生活も十月頃までで、我々の作った赤レンガの二階建の家へ入れてくれた。ナホトカの冬は零下二〇度位までで、夏も日本と大差ない感じで、昼休みに海で水泳をしたこともあった。私のここでの作業は、削岩機で岩場の発破の穴あけ作業が長く続いた。ま

た、二十四年の五月頃より二カ月位、測量の仕事もした。測量はソ連の技師一人、女の技師一人の二人。

我々日本人は三人で、合計五人で二カ月位だった。この頃、ナホトカ港に二日に一度ずつ入港する日本の復員船を高台から眺め、乗船する千人単位の同胞を見送る毎日が続いた（そのうちに順番が回って来るのを期待しつつ）。夜は政治サークルの時間があつたが、余り参加した記憶がない。週一回、休みと入浴がある。

映画も時々あり、『石の花』『シベリヤ物語』等、覚えている。入ソ当時より大変改善された生活であつた。

昭和二十四年九月、大隊本部よりダモイ名簿の発表があり、先発が発見し、本部長何人かが後回しになったが、数日後、ソ連側がお別れパーティーをしてくれた折、マイヨールの奥さんも出られて和やかなパーティーだった。

ダモイで支給された衣服は、ソ連軍の古いラシヤの外套と日本の軍服を染め直した物で、靴はソ連製の革靴と、それに四年間持ち続けた飯盒と水筒で、外套は丸めて二つ折りにし肩から斜めに掛けた姿であつた。

船は「明優丸」と書かれた貨物船で、乗船の前に一人一人名前を呼ばれてタラップを上り、九月二十一日、船上の人となる。

九月の日本海は波が高く、皆、船酔いで大変であった。九月二十四日、舞鶴港東埠頭に無事上陸、復員した。

私は今も健在でいるが、抑留中に亡くなられた方々に思いをいたし、御冥福を祈りたい。なお、抑留とは激戦地の延長であったことも後世に伝えたいと思いません。

【執筆者の紹介】

住 所 長野県下伊那郡松川町上片桐

生年月日 大正十三年二月二十九日

昭和十九年七月

徴兵検査甲種合格

十二月十日

近衛輜重兵連隊入隊（東京東部十七部隊）

十二月二十五日

北支派遣第十七師団

輜重隊転属 北支開封

昭和二十年六月一日

保定予備士官学校入校

北支保定

七月十日

石頭予備士官学校転校

満州石頭

八月二十三日

ソ連軍により武装解除

昭和二十一年四月

キリトマシャフト收容所

タシケント地区

七月

カガン病院入院

十二月

チルチック收容所 タシ

ケント地区

昭和二十三年六月

ナホトカ労働大隊

昭和二十四年九月二十一日

明優丸乗船ナホトカ港出

航

九月二十四日

舞鶴港に上陸 復員

昭和五十三年

全抑協長野県連理事

平成十三年八月五日

ウラジオストク・ナホ

トカ方面慰霊墓参団に参

加

（長野県 北野 和人）